藤田浩子の　少し昔のこと〈94〉

赤ちゃんをあやす　①

「子守泥棒」という昔話があります。庭で爺と婆が畑仕事をしているけんど、仕事がのろいので、まだまだ戻ってこなかんべぇと考えた泥棒が、家のなかに忍び込んで米を盗もうとすると、突然隣の部屋で赤ちゃんが「ほぎゃぁほぎゃぁ」と泣きだします。庭の爺様と婆様に聞こえてはならじと、赤ちゃんをあやす泥棒の話です。「れろれろばぁれろれろばぁ」とあやして、やっとおとなしくなったので、米を盗もうとすると、また「ほぎゃぁほぎゃぁ」泥棒は急いで赤ちゃんのそばにいくと「れろれろばあ　れろれろばぁ」なかなか泣き止まないので「いないいないばぁ　いないいないばあ」と続けます。おとなしくなったので米を盗もうとすると「ほぎゃぁほぎゃぁ」、泥棒は次々とあやし歌を増やして歌い続けます。「かいぐりかいぐりとっとのめ」「ちょちちょちあわわ」「おつむてんてん　ひじとんとん」「あがりめさがりめ　ぐるっとまわってねこのめ」、それでも泣き止まない赤ちゃんを抱っこして寝かそうとしたり、しまいにはそばにあった紐で赤ちゃんを負んぶして「ねんねんころりよ」と子守唄を歌いながら、部屋の中をぐるぐる回って寝かしつけようとします。赤ちゃんをあやす言葉がふんだんにはいっている昔話です。

今、おかあさんだけでなく、保育士さんたちも「あやし歌」を知らない人が増えてきました。昨年亡くなった福音館の松居直さんが若いころ、我が子が泣き止まなくて抱きながらあやしていたら、いつのまにか自分が母親に歌ってもらっていた子守唄が口から出てきたというようなことを書かれていました。そうなんです、あやし歌や子守唄は、その人の体に染みついているというか、奥底のほうにしまわれているのです。それがふっと口をついて出て来るというようなしあわせな体験を子どもたちにも経験してほしいものです。

リレー連載　＜227＞

わたしの大好きな絵本

トトロの好きなお年頃（ペリーズ）

大好きな絵本を２冊紹介します。

１冊目は、生と死をはっぱを通して知らせる「葉っぱのフレディ」。私自身絵本を好きになるひとつとして、音楽から移入することが多いのですが、この物語も音楽をバックに聞いたところ、鳥肌が立つほど感動しました。少々難しい内容かなと思いつつも、当時担任していた４歳児の子どもたちに読み聞かせをしたところ、次の日の夕方お迎えに来た保護者の方から、「うちの子が、昨日読んでもらった絵本に感動して泣きそうになったと言ってました。」とうれしい報告。

★『葉っぱのフレディ』
作　レオ・バルカーリア
絵　島田　光雄　訳　みらい　なな
出版社　童話屋
★『おかあさんだいすきだよ』
作、絵　みやにし　たつや
出版社　金の星社

この言葉で、４歳児でもわかってもらえたんだと喜びひとしおだったことを覚えています。

２冊目は母親向け「おかあさんだいすきだよ」。

この絵本を読んだ時、「そうだよ！こういう風に肯定的に話してあげればいいんだよ。」と、とても参考になった絵本です。

子育てをしているお母さん、ぜひぜひお薦めします。